ています。

今日、こうして〝成人式〟を迎えたことにより、一層それを強く感じています。

最後になりますが、いろいろお世話くださいました町長さんをはじめ、町の方がた、先生方、そしてここまで育ててくれた両親に厚くお礼を申し上げます。

橋場
加瀬 昭浩
さん

はたちになって思うこと

はたちになって思うのは、まずだれでもそう思うだろうが「大人になったのかな」という事だ。形式上は成人だ。十代の人間とは区別される。少年Aではない。ただ自分になにか変化が起こったのかというと、そうでもない。確かに社会人になっている今は、学生時代とは違う、それなりに世間というものが見えてきた気もする。

生まれて二十年たったということだけで成人扱いされることに不安を覚える。一般にいうりっぱな人間になれるのか、自分の仕事に責任をもてるか、今の職で大丈夫なのか、やはり大学くらい出ておくべきだったか。悩んでみてもあと何年かすると大人扱いされるのに慣れ、それなりの事を出来ているようになっているのだろう。

もう一つ、これは二十歳の誕生日を迎える一ヵ月くらい前から考えていた事だが、十代のうちにやり残したことはないだろうか。自分の十代になにか歴史を残してきたか。こう考えるとやれたことがあったはずだ。でも過去を惜しんでも仕方がないので、これからの事を考えよう。とりあえず仕事の面よりはレジャーの方に頭がいってしまう。子供よりは金もあるし脚もある。夜遊びしても仕事がきちっとできていれば文句も言われない。こういった好条件が重なれば、あとで思い起こせる思い出が作れるはずだ。

先日、ひょんな事からある年上の人のアルバムを見せてもらった。高校生くらいの写真から現在までのいろんなシーンがあった。それがすごくカッコ良かった。この人は自分の歴史を持っているとうらやましく思った。はたちになって思う事。りっぱな大人。社会の為になる人間、そういうのはあたりまえなので、あえて言わない。他人に自慢できるような歴史を持つ事が、一人前の人間になれるという事ではないかと考えています。

芝崎
岩澤 敏克
さん

成人として

はたち、成人、成人式、大人、この言葉にどんなにあこがれただろうか。その自分が今、あこがれだった成人式の会場の中にいる。

今、自分の二十年間の人生を振り返ってみると、ただ時にまかせて過ぎてしまったような、だいぶやり残したことがあるような、そんな気がする。そのせいか、あれだけあこがれていた成人式を迎えたのに、ああもう成人式かという感覚しかない。自分自身がこんな調子なのだから大人の仲間入りをさせていただいていいのだろうかと首をかしげたくなる。

しかし、そんなぼやけたことばかり考えないでせっかくの大人の仲間入りをしたのだから、はっきりとした目標を持ってゆきたいと思う。

第一に、自分の悪い面を直してゆきたいと思う。直すといっても欠点だらけの私にとっては、一度に全部直すことは無理なので一つひとつじっくりと時間をかけて直してゆきたいと思う。

第二に、大人の仲間入りをきっかけに初心に返ってみようと思う。今まで子供に見られるのがいやでつい大人びたように見せて、なんだこのくらいという感じで目上の人の指導をまともに聞かないでいたことがあった。しかし、もうそんな背伸びは必要ないし、これからもっと経験を積んでいかねばならないのだから、目上の人の助言や指導を聞いてゆきたいと思う。

第三に、自分にとって一番大事なことで親のことがある。私は、六歳の時に父親を亡くしてから十四年間、母親に育ててもらった。ちょうど育ちざかりの時だったからよほど苦労があっただろうに、そんな苦労を一言も言わずに育ててくれた母親に今、しみじみと「ありがとう」と声をかけてあげたいと同時に、これからは自分の手で、面倒をみてあげたい、そんな気持ちである。いや、気持ちだけでなく、実際にそうしてやらねばいけないのである。

現在母親は、今までの苦労がたまったせいか、病気で療養しているので、自分が面倒をみなければいけないのである。

成人式を迎えたことにより、

飲みません。しめますベルトと気のゆるみ。